子どもとの関係について思うこと

眞 壁 成 子
(鎌倉市立御成小学校)

指導記録を書くことは、子どもに関わっているときの自分の内面を正直に見つめることにつながり、さらに子どもとの関係をとらえるという作業を通して、しばしば、指導の困難さや壁を乗り越える契機となるように思える。子どもとの関係を注意深く見ていくと、内面が見えるようになり、子どもの気持ちに添うような接し方ができるようになると思う。気持ちが通じ合えると子どもは変化し、意欲的に自分を表現するようになる。そして、子どもが主体的な活動をするようになると思える。日常、接するどの子どもとも良い関係ができ、気持ちが通じ合える活動ができたら良いと思っている。子どもは周りの人との関係の中で、より良く育っていくものだと実感することが多い。

A さんは愛着関係が育っていないと診断されて自傷行為や攻撃性を持っている。こだわりのことばや行動を母親から否定されていたが、ことばの教室にくると自分のことばや気持ちを受け入れてもらえるので、自傷行為や攻撃性を出さずに自分の好きなことをして満足して帰ることができる。自分を否定し受け入れない母親には激しい攻撃性を出すことがある。それでも、母親はその子にとってなくてはならない存在なのである。母親に認めてもらいたいのに母親がそれに気付かず、Aさんの気持ちとずれたところで関わっている。この親子関係をどうしたらよいのかと悩んでいたが，A さんが教室に来るようになってから、母親が受容的に関わるように変化してきて攻撃性や自傷行為が減ってきた。A さんの気持ちに添って活動していくと顔が輝いてくる。楽しそうな表情は、満足していることを表している。Aさんは、自分の気持ちを受け入れてくれる人や所を十分に感じていて、ことばの教室を楽しみにしている。Aさんと関わる人の接し方によって、気持ちが安定し状態が変化してくる。人との関わりの中で、自分の行動をコントロールする A さんである。時に、A さんに課題を提示するとやりたくない気持ちを言えずに、むりやり取り組もうとするが、自分のその気持ちをコントロールできずに、突然に自傷行為が出てくることがある。関係ができているようでも、また、崩れてしまうような関係なのかと思う。気持ちに添えない時の担当者と A さんとの関係はまだ奥がありそうである。

出会ってまだ日の浅い B さんとは始めから楽しい会話のやり取りや遊びが展開できた。Bさんは担当者とやりたくて、凝った手作りのゲームや遊び道具を持ってくる。自分の作ったゲームや遊びをできることが楽しいらしい。自分に合わせて活動を楽しんでくれる人がいて、緊張や気負いや責められることがない雰囲気で自分を表現できるためか、良く話し活動する。回を重ねる毎に B さんのもっている課題が少しずつ軽減してくることが見られる。担当者といっしょになにかをやりたい、共に活動を共有したいという思いが感じられて、担当者も次の指導日を楽しみにしている。

B さんとは関わりにくいとか、通じにくいとか感じるわけではないが、だからと言って B さんの内面が分かっている段階でもない。関係をどうとらえるかと悩まずに、ただ、楽しい活動をしているばかりなのだが。B さんとの関係に生き詰まる時がいつかくるのだろうかと思っているが。

親子関係に課題のある C さんとはなかなか関係ができにくいと感じている。指導のたびに手に余り悩んでいる。やや遅れがあり発音が不明瞭で課題をいっぱいもっている。C さんと取り組みたいことはたくさんあるし、準備もしているのだが、時間切れになってしまう。気持ちが乗ると課題に持続的に取り組めたり、二人で笑い合う楽しい時もあるが、不満足のままに指導を終えることが多い。もっと C さんを受け入れて根気よく関わっていけたらと思うが、難しい。関わり手からの関係障害も生じそうな感じである。C さんとの信頼関係を築けない状態である。関係が十分できないので、やりたい活動が展開できない。楽しい活動やお互いの思いを引き出せないでいる。かえって課題が出てくる感じである。今後、どんな関わり方をしたら共感関係が築けるだろうかと思う。

通じ合える関係ができると、子どもは担当者との関係の中で、自分を最大限に表現しようとし、持っている能力を発揮していくようになると思われる。

子どもとの関わりの中で子どもが主体的に生きていけるような関係を作り、子どものあるがままの姿や行動、思い、存在を受容することができたら、コミュニケーション障害は、なくなると思う。そのような関わり手と出会えることで、子どもは自己を発揮し、発達していくことになると思う。

最近、いろいろな場で子どもとより良い関係を作ることが大切であること、子どもが生きている関係の中では、子どもが自ら行動を起こしていけるようになる。子どもの主体的で自発的な発信を担当者が見逃さずとらえ、子どもの活動を伸ばしていくことが、その子どもの発達を真に促がすことに繋

がるという報告に私も心から共感する。教育に携わる者として子どもが生き生きと成長していくことに関与できる喜びを感じる。

このような関係性について思いを巡らせる機会を与えられたことに感謝している。

研究に参加させていただいて

石　井　裕　子
（鎌倉市立御成小学校）

私が「コミュニケーション障害における子どもへの教育的援助に関する研究」に参加させていただいたのは平成6年度から平成9年度までの一般研究をまとめた報告書がちょうど出来た時で、研究としては一つの区切りを迎え、次のステップとして「関係を把握するための資料収集の在り方」という視点で関係記述法の検討という段階に入ったところでした。松村先生、牧野先生、そして、以前から研究に関わってきたことばの教室のお二人の先生からこれまでの取り組みのお話を伺いながら「コミュニケーション」について学ばせていただいてきました。

最初は、“よく分かっているようなことでありながらなかなか分かりにくい”という面をとても感じていました。それは、自分が今まで意識することなく行ってきていた部分を、改めて「関わり合い」という観点で振り返ってみようという作業であること、自分の今までの取り組みの姿勢が子どもの能力に注目し、自分の指導でよい方向に向かわせていかなくてはいけないというところにあり、その視点を見直していくことにかなりの苦労を要していたからだと思います。更に、子どもに対して“働きかけをする”ということを全く否定している立場として受け止めており、そこが理解を尚一層難しくさせていました。しかし、「分かり合う」「関わり合う」という観点を頭の隅に置きながら自分と子どもとの関係を積み重ねていくと、取り組みの中から少しずつ実感できる場面も出てくるようになってきました。

例えば、昨年の4月からグループ学習への参加を始めた子どもが、友だちとの関わりを通して気持ちが育ち、そのことが取り組みへの自主性や積極性、向上心にもつながっていく様子を目にすることができました。その子どもにとっては、まずグループ学習の場が楽しさを共有できる場として捉えられ、そこから友だちともっと楽しく過ごしたい、もっと喜びを共有したい、もっと認めてもらいたいという思いが出てきているのだと思います。楽しいと思える場と時間がある、自分を受け入れ自分を認めてくれる仲間がいるという実感の積み重ねが土台となって、そこから自主的で積極的な行動が生まれ、ことばや気持ちが豊かになっていく様子を実感できた思いです。そのようになった時の子どもの何とその子らしさが出てくることでしょうか。何と生き生きしてくることでしょうか。そして、子どもの変化は、自分と子どもとの関係を振り返るいい機会にもなっていきました。

子どもの個性をどのように受け止め、如何に楽しさを共有していけるか、そして自分の内面をどのように振り返っていけるかが今後の自分の課題と受け止めています。